

談話標識 so の多機能性についての一考察¹

西川 眞由美

[要約]

DM so は、従来、後件が前件から導き出される結果（結論）であることを示すために用いられると考えられてきた(Schiffrin 1987: 191-227; Blakemore 1988: 191-227 他)。しかしながら、DM so の機能は非常に多様で、談話の中のさまざまな節目に生起し、会話の開始や終了、話題の調整（導入・転換・展開・回帰など）や談話の総括などを表すためにも用いられる。Schiffrin や Blakemore の考察は、DM so の基本的な例は説明することができるが、このような発展的な例を説明することができなかった。本稿では、さまざまな DM so の使用例を分析し、DM so の多機能性について考察する。そして、DM so が記号化する意味は Schiffrin や Blakemore によって研究された機能的意味であり、談話の中で DM so が持つと考えられるさまざまな機能はその文脈で後続発話に関する聞き手の解釈において語用論的に導出される文脈効果であることを示す。さらに、それぞれの機能の違いは、どこまでを解釈に必要な作用域としてとるか、そしてどのような文脈想定を解釈の推論プロセスに使うかなどに起因することを示す。

話の開始・終了、話題の導入・転換・展開などさまざまな発話行為を行うときにも用いられ、その文脈における聞き手の発話解釈において重要な役割を果たしていることがわかる。

本稿では、このような DM so の機能の多様性に着目し、いろいろな事例を詳細に分析することにより、それぞれの機能がどのように起こるのかを明らかにすることを目的とする。2 節では、DM so に関する Schiffrin や Blakemore の先行研究を概説し、3 節ではさまざまな DM so の使用を映画台本や小説の中の会話などから事例を用いて分析する。4 節では、それぞれの使用において DM so が聞き手の発話解釈にどのように関与しているのかを考察する。そして、一見多機能に見える全ての DM so の使用の根底にはやはり前後の発話内容や状況に基づいた因果関係が存在すること、そしてそれらの機能の違いは、それぞれの DM so が解釈のために必要とする作用域や、他の文脈想定とともに導出される語用論的効果の違いに起因することを示す。

2. 先行研究

接続詞 so の DM としての機能を初めて体系的に考察したのは、結束性理論 (Coherence theory) の枠組みによる Schiffrin(1987)の研究である。Schiffrin は、DM so の言語構造上の役割だけでなく、前後にどのような意味的關係が存在するのか、またそれによりどのような行動を引き起こすかなど、人間の伝達における DM so の機能的側面をダイナミックにとらえている。Schiffrin は、理由と結論(reason and result)という意味的關係から DM because と DM so を対比させ、日常生活におけるさまざまな会話例を取り上げて、それらがどのように使用されているかについて分析を行っている。しかしながら、Schiffrin の DM so の機能分析はあくまで前後の発話内容に関する意味關係に限られており、(3)(4)(5)に見られるような DM so が談話の中で展開する「より発展的な使用」までには及んでいない。

次に、Blakemore(1987: 85-87, 1988, 1992:138-140)は、認知語用論である関連性理論(relevance theory)の枠組みで、伝達と解釈という新しい観点から DM so の機能の考察を行った。Blakemore は、so や after all のように前後の命題内容の関係を表すことで聞き手の発話解釈に貢献する言語項目をいわゆる談話連結詞 (discourse connective) と呼び、「P so Q」という構造の中で、談話連結詞の so は導入する Q の命題内容が先行発話 P から入手した想定 of 文脈含意であることを示すために用いられること、またそうすることにより聞き手の発話解釈における推論プロセスに制約を課し、解釈そのものにかかる労力を軽減することで関連性を有する言語項目であるとしている。さらに Blakemore は、P は常に先行発話によって伝達される命題内容と

は限らず、発話状況から入手可能な想定であれば何でも Q という文脈含意を引き出す前提 P になりうるとしている。(6)(7)を見てみる。

(6) A: You take the first turning on the left.

B: *So* we don't go past the university (then). (Blakemore 1992: 139)

(7) (Hearer (who is driving) makes a left turn.)

So we're not going past the university (then/after all). (ibid.)

いずれの例でも、話し手は DM *so* を使用することによって、これから導入する「大学の前を通らない」という内容が当該文脈の中で入手可能な「(最初の角を) 左折する」という想定から引き出される文脈含意であることを聞き手に示している。両者の違いは、入手可能な想定が(6)では A の発話として言語化されており、(7)では発話状況自体から認識される（言語化されていない）情報からの想定であるということである。このように、Blakemore は、談話連結詞 *so* は当該文脈において聞き手が得た想定を前提として導出した文脈含意を後続発話を使って導入することを示すことにより聞き手の解釈に制約を課すという手続き的意味(procedural meaning)を記号化するものと分析しているのである。³

一方で、Blakemore も Schiffrin と同様に、第 1 節で述べた(3)(4)(5)のような発展的な使用に関しては述べていない。しかしながら、人の発話解釈における認知メカニズムを考えると、前後の発話内容だけでなく発話状況などから得られるさまざまな想定を解釈プロセスに使うという Blakemore の談話連結詞 *so* についての基本的な考察結果は非常に妥当であると思われ、DM *so* によって表されるその他の使用の説明にも十分援用可能であると考えられる。本稿では、DM *so* に後続する結論（あるいは文脈含意）は、発話によって表出される命題内容だけではなく発話行為も含まれること、また推論の前提となる想定は直前の発話内容からだけでなく、先行する話題や発話（談話）全てによって伝達される内容も含まれること、つまり DM *so* が作用する認知領域をさらに広げて考えることで DM *so* が談話の中で展開するさまざまな使用に関しても説明できることを示す。

3. DM *so* の事例と考察

本節では、多様な談話の節目に生起する DM *so* の例を分析し、それぞれの状況でどのような役割を果たしているかを詳細に分析する。

3. 1 論理的・推論的結果（結論）を表す DM so

まず、先行発話の内容をもとに論理的に推論した結果を DM so の後続発話で示している例を見てみる。

- (8) Emily: Andrea, Runway is a fashion magazine, **so** an interest in fashion is crucial. (映画 *The Devil Wears Prada*)
- (9) Andy: [...] I need to get to Magnolia Bakery before it closes. It's Nate's birthday tonight. **So** we're, uh, having a little party for him, and...[...]. (ibid.)
- (10) Erica: How old are you?
Julian: I'm 36.
Erica: **So**, I'm almost twenty years older than you. That's a lot of years to be older than somebody, don't you think? More than twenty years older than you. (映画 *Something's Gotta Give*)

(8)は、大学を卒業したばかりのアンディ（アンドレア）が、ダサイ服装でファッション界きっての有名雑誌「ランウェイ」編集部のアシスタントの就職面接に来る場面である。アンディを一目見た第1アシスタントのエミリーは「ランウェイがファッション誌である」ことの論理的結論として「ファッションに興味を持つことが大切である」とアンディに述べている。(9)では、仕事が終わりにいそいそと帰り支度を始めたアンディが「今日は（ボーイフレンドの）ネイトの誕生日である」という内容をもとに「ちょっとしたパーティを開く」という論理的結果を導入している。(10)は、青年医師のジュリアンにデートに誘われた中年女性のエリカが2人の年齢差について話し出す場面である。年齢を聞かれて「36歳です」と答えるジュリアンに対し、エリカは「私は20歳も年上である」という論理的結果を導入するのに DM so を使っている。

さらに、(8)(9)より広範囲の先行発話内容の結論を DM so に後続する発話内容で導入している(11)を見てみる。ここでは、ランウェイの編集長ミランダが、社長が自分以外の女性を新たに編集長に迎える画策をしていたことを知り、いろいろな手を使って社長を説得し考え直させたことを部下に話している場面である。「自分のように仕事をできる人間は他にいないこと」、「他の人間に任せるとこの雑誌はダメになってしまうこと」、「自分が育てたデザイナーやカメラマンたち、編集者やライターやモデル、皆が自分を支持していること」などの事実をもとに、「彼（社長）は翻意した」という結論を導入しているのである。

- (11) Miranda: Truth is, there is “no one” that can do that I do. Including her. Any of the other choices would have found that job impossible, and the magazine would have suffered. Especially because of the list. The list of...designers, photographers, editors, writers, models, all of whom were found by me, nurtured by me, and have promised me they will follow me whenever and if ever I chose to leave Runway. *So* he reconsidered. (映画 *The Devil Wears Prada*)

次に、後続内容が先行内容をもとにした推意結論を表している例を考える。

- (12) Nigel: ... You know that cellulite is one of the main ingredient in corn chowder.
Andy: *So* none of the girls here eat anything? (映画 *The Devil Wears Prada*)
- (13) “You mean like banks and insurance companies?” Elizabeth asked. Charles nodded. “Exactly.” “And they’ll put their people on the board of directors?” “That’s usual...” Elizabeth said, “*So*, in effect, they would control Roffe and Sons.” (Sheldon, *Bloodline*. p.210)
- (14) Dave: *So* you’re not ready to show me any pages? I’m not putting any pressure on you, I’m just asking. (映画 *Something’s Gotta give*)

(12)では、アンディが DM so を使い「だからこの会社の女の子たちは何も食べないのね」と、それに先行する「セリュライトはコーンチャウダーの主成分である」というナイジェルの発話内容をもとにした推論結果の正当性を確認している。(13)は、ロフ・アンド・サンズという薬品会社の社長の娘エリザベスが、急死した父親の部下チャールズと話している場面である。DM so で導入されている「実際は彼ら（銀行や保険会社から役員として送られてきた人たち）が会社を牛耳ることになるだろう」というエリザベスの発話内容は、その前のチャールズの一連の発話内容をもとに推論した結論であることを示している。(14)では、DM so によって導入された「まだ私に渡す原稿は準備できていない」というデイブの発話内容は、原稿を取りに来た演出家のデイブに脚本家のエリカが何も渡さない状況のもとで彼が推論した結果であることを示している。このように、DM so によって導入される後続発話内容は、先行発話（一連の発話群を含む）の内容、あるいは話し手が発話状況から得た情報をもとに推論した結果（結論）であることがわかる。

3. 2 談話（会話）の開始・終了を表す DM so

DM so は、話し手が後続発話を導入することで会話を開始したり、終了するときにも使用される。まず、話し手が会話を開始するとき使用される例を見てみる。

(15) Harry: **So** baby, you're rich... (映画 *Something's Gotta Give*)

(16) Kate: **So** this is a kitchen. (映画 *No Reservation*)

(15)は、ハリーとマリンが彼女の母親が所有する海辺の別荘へ車で向かう場面である。ハリーは周囲に建ち並ぶ豪邸などから得られる情報などをもとに導かれる結論として「君は金持ちなんだね」という発話を導入しつつ、おもむろに会話を開始している。

(16)は、事故で無くなった姉の1人娘ゾーイを引き取って育てることになったケイトが初めてゾーイを自分の家に連れてきて、家の中を案内する場面である。「で、ここが台所よ」と案内を開始する場面で DM so が使用されている。ここでは、それぞれ DM so の後続発話によって伝達される内容は、発話状況から得た想定をもとに話し手が導出した結論であると同時に、会話の開始という発話行為も遂行していると考えられる。

次に、会話の終了を示す DM so の例を見てみる。

(17) Shari: And to eight bridal stores where she helped me cling to my
self-esteem...

Suzsane: As I tried on dress after dress...

Shari: **So**, thanks Jane! (映画 *27 Dresses*)

(18) Erica: Well, this was fun. And it was so great to see you. Honest.

Harry: **So**... it was great to see you. [...] (映画 *Something's Gotta Give*)

(17)は、ジェーンの献身的な努力により素晴らしい結婚式を挙げる事ができたシャリとスザンヌが、最後にジェーンへの感謝を伝える場面である。2人はそれぞれの先行発話で伝えられる「8件もブライダルショップをあたってくれた」ことや「何着もドレスの試着に付き合ってくれた」ことの結果として感謝の意を DM so の後で述べると同時に、会話を終了しようとしている。(18)では、食事の後でエリカの別れの挨拶を受け、その結果ハリーも DM so を使って別れの言葉を伝えるとともに、(一旦)会話を終了しようとしている。ここでも、DM so に後続する発話内容は先行発話の内容から導出された結論であると同時に、話し手が発話状況から得た「そろそろ会話を終えるべきだ」という想定の結果として会話を終了しているとも考えられる。

以上、DM so は、会話の開始や終了の場面で、発話状況や先行発話からの情報をもとに導き出した結論を導入するとともに、その場の状況から「会話を始めるべきだ」「会話を終えるべきだ」と考えた話し手が、その結果としてそれらの発話行為を行うことを示すために効果的に使用されていることがわかる。

3. 3 話題の調整を表す DM so

DM so は、会話（談話）の中で、大事な話題を導入したり、現在話している話題を他の話題に変えたり、あるいは今の話題をどんどん展開したり、一旦それてしまった話題を元に戻すようなときにも頻繁に用いられる(Bolden 2009 参照)。

まず、会話参与者たちによる軽い前置きの後、いよいよ主要な話題を導入する時に用いられる DM so の例を見てみる。

- (19) Miranda: Okay. *So*... first of all, we need to move Snoop Dogg to my table.
(映画 *The Devil Wears Prada*)
- (20) Harry: Right. Wow. It's the perfect beach house. *So*, what are we gonna do out there, just the two of us, for two whole days?
(映画 *Something's Gotta Give*)
- (21) Marin: *So*, Mom, how's the new play? You getting' happy with it? (ibid.)

(19)は、ちょうど部屋に戻ってきたアシスタントのアンディにミランダが翌日の昼食会の席順についての話題を導入する場面である。(20)では、恋人マリンと海辺の別荘に到着したハリーが、DM so を使って「2日間、2人だけで何をしよう？」と一番関心のある話題を切り出している。(21)は、マリンが恋人のハリー、母親のエリカと叔母の4人で夕食を始める場面である。劇作家のエリカが別荘で執筆中であることを知っているマリンは、DM so を用いて仕事の進捗状況についての話題を導入している。これら例では、DM so の後続発話の内容はそれぞれの発話状況で話し手が持っている想定から導き出した結論であると同時に、その状況から「そろそろ重要な(真剣な)話に入るべきだ」と考えた話し手がそのような重要な話題の導入という発話行為を行なうという結論に達したことをDM so で示していると考えられる。

次に、相手の話を受けて、あるいは自らのターンの中で現在話している話題を変える際に使用される DM so の例を見てみる。

- (22) Frances: I can make this work. You know? Of course I didn't mean I was

gonna do all the work myself. I mean Italy. I can hire the descendants of Roman gods to do the heavy lifting. Then, just supervise, tell them what to do.

Patti: *So*, have you met him yet? (映画 *Under Tuscan Sun*)

(23) Kate: Hello?

Christine: Hey, it's me. I'm just checking in. We should be there about 9.

Kate: Great, so I'll make sure I'm back by then.

Christine: Okay, cool. *So*, what are you doing? Reading a recipe, right?

Kate: Christine, don't be ridiculous. I do have other interests.

(映画 *No Reservation*)

(22)は、離婚で傷ついた心をいやすために旅行したイタリアのトスカーナで古い家を買って住むことになったフランシスが、アメリカの親友パッティにそのことを電話で報告している場面である。家の改装の話が一段落した後、パッティは DM so を使わずずっと聞きたいと思っていたフランシスの新しいロマンスの話題に変えている。(23)は、妹のケイトの家へ遊びに行く途中で、姉のクリスティンが車の中から到着時刻を連絡する場面である。その後、DM so を使って「今何をしているの、またレシピを読んでの？」と話題を変える。これらは、いずれも他の話題について話したいと思っている話し手が、ある話題が一段落した時「今その話題に変える時だ」という結論に至り、話題転換という発話行為に及んでいると考えられる

次は、話題回帰の際 DM so が使用されている例である。

(24) Erica: I read that article. That was you? Well, you were once engaged to somebody big. Who was it? Joan Colins... No, Wait... Carly Simon?

Zoe: Yeah, somebody cool like that. Not Martha Stewart...

Marin: You could just... ask him.

Harry: No this is more fun. It's like I'm not here.

Marin: Harry was once engaged to Diane Sawyer.

Erica: What?

Zoe: Right. Diane Sawyer. I love her.

Erica: I'm impressed.

Harry: Yeah, women your age love that about me. You know what I mean.

Erica: Yes I do.

Harry: It's not a bad thing to say 'women your age'.

Erica: No...I'm sure it was a compliment.

Harry: It was...just an accurate observation. It's...

Zoe: **So** when was the engagement? (映画 *Something's Gotta Give*)

(24)は、エリカとゾーイがハリーが昔婚約をしていた話を持ち出した後、その相手であるダイアン・ソイヤーについて語り出し、さらに彼女に対する評価など、話がどんどん思っているのとは異なる方向へ向かう中で、ついにハリーが言葉に詰まってしまう場面である。そこで、ゾーイが **DM so** を使い「ところで婚約はいつだった」と話を元に戻すのである。**DM so** によって示されるこのような話題の回帰は、話し手ゾーイの「ハリーの婚約のことについてもっと知りたい」という思いの結果でもあり、同時にハリーが困っている状況を何とかするために「元的话题に戻すべきだ」と判断した結果遂行される発話行為でもある。

DM so は話題を次々に展開していくときにも使用される。(25)を見てみる。

(25) Kate: **So** where did you go to cooking school?

Nick: Oh, as a young child, I sat at my grandmother's knee...[...]

I owe my entire career to a girl named Sophia.

Kate: Sophia?

Nick: She's my first love. An older woman. [...]

Kate: **So**, what happened to Sophia?

Nick: Her father found out what we were up to and he fired me.[...]

I spent the next couple of years working in some of the best restaurants in Milan.

Kate: **So** how come you're not running your own kitchen by now?

Nick: I don't know. I guess the right offer hasn't come my way.

Kate: **So**, what would you do if you had your wish? (映画 *No Reservation*)

(25)は、同じレストランでシェフとして働いているケイトとニックが、初めて2人だけでプライベートな話をする場面である。ケイトはニックが料理を始めたきっかけ、イタリアでの料理修行の様子、修行したレストランでの女性との出会い、その顛末などについて **DM so** を使いどんどん質問をぶつける。つまり、ニックの話の内容を受け、その結果ケイトの心の中に次々と生まれた関心事を **DM so** を使って導入してい

るのである。ここでは、後続発話の内容は先行する談話の内容をもとに導き出されたものである。一方で、相手に非常に興味を持っていることを話し手が強くアピールしたい時には、話題展開という行為そのものが話し手の主たる意図になるかもしれない。その場合、話題展開という発話行為は、その発話状況から「(相手に興味や興味を持っていることを強く伝えるために)さらに他の話題についても語るべきだ」と話し手が判断した結果と考えられる。

3. 4 先行内容の総括を表す DM so

DM so は、「では (じゃあ)、ということは」と、すでに終わった会話の内容や発話状況などから得た情報全てに関する最終的なまとめを述べる時にも用いられる。以下の例を見てみる。

(26) Marin: Knock, knock.

Julian: I'll see you on the way out. I'll catch you on the way out.

Harry: Thank you. *So*, I'm some great date, huh?

Marin: Yeah... Mr. Excitement. (映画 *Something's Gotta Give*)

(27) Frankel: Yes. There's uh...straight up chromium, does all kind of good things for the body. There's chrome three, which is fairly benign. Then there's chrome six, hexavalent chromium, which, depending on the amounts, can be very harmful.

Erin: Harmful, how? Like, what would you get?

Frankel: Eh, with repeated exposure to toxic levels, God, anything really from chronic headaches and nosebleeds to respiratory disease, liver failure, heart failure, reproductive failure, bone or organ deterioration, plus, of course, any type of cancer.

Erin: *So*, that stuff, it kills people. (映画 *Erin Brockovich*)

(26)は、マリンがデート中に心臓発作を起こして入院したボーイフレンドを見舞う場面である。自分の発作のせいでせっかくの海辺の別荘でのデートが台無しになってしまったと思っているハリーは、DM so を使い「とんだデートの相手だったね」とすまなさそうに一連の出来事を総括している。(27)では、大企業相手に公害訴訟の調査をしているエリンが、6 価クロムの人体に及ぼす影響について研究者の話を聞き、DM so を使って「6 価クロムは人の命を奪う (非常に危険な) ものなのね」と締めくくって

いる。これらの例で DM so によって導入される発話内容は、これまでの状況やいきさつ、あるいは発話内容全体から話し手が導き出した推論結果だと考えられる。

4. 考察

前節では、実際に使用されている例を用い、DM so がさまざまな談話の節目で先行発話や発話状況から論理的・推論的に出した結果（結論）を導入したり、会話の開始や終了、話題の調整、また一連の会話の全容を総括するような場合に使用されること、またそういった発話行為を遂行するために使用されることを見た。さらに、いずれの場合にも DM so によって導入される発話内容や発話行為はそれに先行する何らかの情報内容を前提として話し手が出した結果であることが分かった。本節では、Blakemore の談話連結詞 so の考察をもとにし、さらに語用論的な認知効果という観点から DM so の多機能性を探る。そして、DM so によって示される機能には、聞き手の解釈に必要な DM so の作用域とそれぞれの文脈において聞き手の推論の前提となる情報や想定が大きく関係していることを示す。

まず、DM so の解釈における認知構造と記号化する意味機能は、Blakemore (1988) の分析にもとづき(28)のように規定する。

(28) a. DM so の解釈における認知構造

「P So Q」

b. DM so に意味論的に記号化された意味

「Q を、P を前提にして語用論的に導出した結論として解釈せよ」

Blakemore の分析では、P と Q の作用域に入るものは、それぞれ先行発話によって伝達される命題内容（あるいは、発話状況から入手可能な想定）、後続発話によって伝達される命題内容に限定されていた。その故に、3.1 のような論理的・推論的結論を導入する例は説明できても、それ以外の事例の解釈メカニズムを説明することができなかった。本稿では、新たに(28a)の認知構造における P の作用域を、先行発話によって伝達される命題内容、あるいは発話状況から入手できる情報に加え、先行する話題や発話（談話）全体によって伝達される内容にまで広げる。そして、それぞれの文脈で聞き手がどのような作用域からどのような文脈想定を推論プロセスに使って結論を出しているのかを明らかにすることで、Blakemore の考察で説明できなかった様々な使用に妥当な説明を与えることができることを示す。

まず、3.1 で見た DM so の最も基本的な使用である後続発話の内容が先行内容の論

理的・推論的結果（結論）であることを示す場合を考えてみる。⁴ この場合は、P の作用域は先行節、先行発話から伝達される内容、また発話状況などから入手可能な想定となる。例えば、(8)(9)では話し手自身の先行発話によって伝えられる内容を、(10)(12)では相手の発話内容によって伝達された内容を P の作用域にとり、それぞれ後続発話によって伝えられる内容 Q をその結論として解釈するよう DM so は指示している。(11)(13)のように、先行発話や相手とのやり取りの内容全てを P の作用域にとり、それを前提として導出した結論を後続発話によって伝える場合もある。(14)では、DM so で導入される話し手の推論結果の前提となる想定 P の作用域は、発話状況において話し手が感覚器官や知識・記憶などから入手する情報である。

次に、3.2 で見た会話の開始と終了の節目で使用される DM so の場合を考える。この場合も基本的には、P の作用域は先行発話で伝達される内容や発話状況から得られる想定となり、それを前提として導出した結論として Q を解釈するよう DM so は指示している。例えば、会話を開始する(15)では、ハリーが道路沿いに建ち並ぶ豪邸から入手した情報と「マリンはこの地域に別荘を所有している」という想定を前提とし、「マリンは金持ちだ」という結論を導出し、それを DM so の後続発話で述べていると考えられる。(16)では、状況から「ゾーイに家の中を案内しなければならない」と考えているケイトが、そのような想定をもとに「ここがキッチンである」という結論を導入しているのである。また、会話を閉じようとする(17)や(18)でも、後続発話で導入される感謝の意や別れの挨拶は、それに先行する発話内容や発話状況(楽しい食事や会話など)が前提となって導出された結論である。同時にこれらの例では、「そろそろ、会話を開始（終了）しなければならない」という想定を話し手が発話状況から入手し、その結果として会話の開始(終了)という発話行為を導入するとも考えられる。⁵ いずれの場合も、DM so の意味機能は「Q を、P を前提として導出した結論として解釈せよ」ということには変わりはない。話し手の意図が、先行内容から導き出した結論としてあることを後続内容で伝えることにあっても、会話の開始や終了といった発話行為の遂行にあったとしても、DM so の意味機能は維持されており、異なるのは P の作用域と解釈における推論プロセスにどのような文脈想定を使用するのかということだけである。そして、話し手の意図が「会話の開始・終了」という発話行為の遂行にあればあるほど DM so はその役割により貢献していると考えられる。

3.3 で見た話題の調整に関わる DM so の場合を考えてみる。新しい話題を導入したり、今話している話題を変更したり、一旦それら話題を元に戻す際に使用される DM so の場合、P の作用域はその状況で話し手の心内にある「特定の話題 A を今導入したい、特定の話題 A に変えたい、前に話していた特定の話題 A に戻りたい」とい

うような想定で、DM so はそういった想定を前提として導出した結論として後続発話の内容を解釈するよう指示している。同時に、後続発話を導入した結果として「新しい話題の導入、話題の転換、話題の回帰」といった発話行為もまた遂行されている。つまり、話し手の意図が、後続発話で導入する新しい内容そのものにある一方で、新しい話題の導入、話題の転換、話題の回帰といった行為が語用論的に派生しているのである。例えば、(19)では発話状況から「明日の昼食会の席順について話さなければならぬ」と考えた結果ミランダは DM so を用いて後続発話でそのことを伝達すると同時に、そうすること自体が新しい話題の導入という行為を遂行しているのである。話題転換の(22)の例では、パティが「フランスに新しい男性のとの出会いについて聞きたい」と考えた結果、そのことを後続発話で導入すると同時に、話題転換という行為を引き起こしている。話題回帰の(24)の例でも同様に、「もう一度、ハリーの婚約について聞きたい」という思いがゾーイの中に起こり、後続発話でそのことをたずねているが、それと同時に、話題回帰という発話行為を遂行しているのである。

一方で、話し手の主たる意図が、導入する話題そのものよりそういった発話行為の遂行にある場合もある。その場合、P の作用域は発話状況の中で話し手の心内にわきおこった「ある話題を導入すべきだ、話題を変えるべきだ、元的话题に戻るべきだ」といった想定となる。そして、DM so はそういった想定をもとに導き出した結論として後続発話によって遂行される発話行為を解釈するよう指示していると考えられる。例えば(24)では、エリカの鋭い指摘を受けて言葉に詰まったハリーが困っているのを見て「何とかしないとイケない」と思ったゾーイが「話題を元に戻すべきだ」と考え、その結果話題回帰という行為を導入しているかもしれない。⁶

いずれの例でも、DM so の意味機能は「Q を、P を前提にして導出した結論として解釈せよ」ということであり、ある内容を前提にした結論を伝える場合にも、話題の調整という発話行為の導入自体に話し手の主たる目的があるときにも、この意味機能は適用されている。そして、話し手の意図が後者にあればあるほど DM so は「話題の調整」に関する発話行為の遂行により貢献していると言える。

さらに、会話の中で次々に話題が展開していく際に使用される DM so の場合、P の作用域は基本的に先行する発話や話題の内容となる。例えば(25)では、直前の話の中で次々と提供されるニックの発話内容をもとに、ケイトの心内にわきおこったさらなる疑問や興味を新たな話題として要求していると考えられ、決して話題を展開すること自体に話し手の主たる意図があるわけではない。⁷

最後に、全体のまとめ(総括)の場面で用いられる DM so の場合を考える。ここでは、P の作用域は先行発話全体によって伝えられる内容となり、DM so はその内容

を前提として導出した結論として後続発話の内容を解釈するよう指示している。(27)では、エリンが先行談話の内容全体から導き出した結論を後続発話で伝えている。また(26)のハリーの発話の例のように、先行する会話だけでなく今までの出来事やいきさつの全てから話し手の中に形成された想定を P の作用域に取り、その総括を後続発話とする場合もある。⁸

5. 結論

本稿では、談話の中でさまざまな役割を持つ DM so について、認知語用論的な視点からその多機能性について考察した。まず、いろいろな DM so が使用されている事例を詳細に分析し、そこには常に何らかの因果関係が存在することを確認した。その上で、Blakemore(1988)の関連性理論による DM so の分析をふまえ、DM so が記号化する機能的意味は 1 つであること、つまり意味論的には「Q を、P を前提として導出した結論として解釈せよ」という機能的意味を記号化しており、その意味は談話の中のどのような DM so の使用においても保持されていることを示した。そのうえで、会話の開始や終了、話題調整や談話の総括などの DM so の談話内での役割は、DM so をめぐる解釈プロセスにおいて語用論的に派生する認知効果であること、また、それぞれの機能の違いは、解釈に関与する作用域や、結論を導く前提となる文脈想定の違いに起因することを示した。つまり、DM so を含む発話の解釈において出てくる多様な機能は、DM so が記号化する機能的意味、聞き手の解釈に関与する認知的作用域や、またそこから聞き手が入手する文脈想定などから語用論的に導出される文脈効果なのである。さらに、本考察によって Blakemore や Schiffrin では説明できなかった DM so のいろいろな使用例に関しても妥当な説明が可能であることを示した。

一方で、談話に見られる DM so の使用法には多少の重複が見られる。例えば、(15)や(16)は新しい話題を導入することで会話を開始しているとも考えられる。また(17)と(18)では、それぞれ DM so の話し手が話題の総括をすることで会話を終了しているとも考えられる。さらに、話題の導入・転換・展開・回帰のような話題調整機能に関しては、いずれも新しい話題の導入の下位カテゴリーとも考えられる。さまざまな語用論的要因が複雑に関連し合い、結果として異なる調整機能が現れていると思われる。このように、用法どうしの関係等に関しては、今後の研究課題とする。

注

1. 談話標識という用語は統一された理論的定義を持たないが、本稿では、Schourup (1999: 230-234) で示された特徴(connectivity, optionality, non-truth-conditionality, weak clause association, initiality, orality, multi-categoriality)のいくつかを有し、「何らかの制約を課すことによって聞き手に主発話を話し手の意図した方向で解釈させるように仕向ける表現」という定義のもとに、談話標識という語を使用する。
2. 特に DM so は会話で頻繁に使用されるとされている(Biber et al. 1999: 877, 886-887)。
3. 手続き的意味については、Wilson and Sperber (1993: 1-2)を参照。
4. 推論結果として導入する場合、その後続発話は断定だけでなく質問・提案・依頼・命令などの発話行為としても導入される。特に質問として導入される例が多く見られ、話し手自ら推論した内容を yes/no 疑問文で確認したり、wh 疑問文を使って推論情報の一部を求めたり、相手に推論結果の内容そのものをたずねる場合には So (what)?という形が用いられる。
5. DM so は、後続発話の導入により何らかの推論結果を情報として導入することを聞き手に示すと同時に、(15)(16)のように「今から会話を始める」という合図になり聞き手の注意を喚起する機能も果たしていると考えられる。このように、DM は様々な意味で基本的に多機能である。
6. あらぬ方向に進んでしまった話題を元に戻す際、元の話の内容に関する質問の形で導入されることが多い。これは、話し手が充足させたいと思う情報を相手に依頼する形をとることとさらに元の情報への興味の深さを示し、そうすることで元的话题に戻る許可を得やすい環境を作ろうとしているのだと考えられる。
7. 話題展開では、wh 疑問文を使った質問の形で話題が展開していくことが多い。それは、先行発話の中のある特定の部分に特に興味を持った話し手がさらにそのことについて新しい情報を求めようしたり、あるいは先行内容に疑問を持った話し手がさらに異なる視点からそのことを探ろうとする意図があるためだと考えられる。
8. 話題調整の場合は DM so は質問の形で生起することが多いが、総括の場合は断定文として来ることが多い。「まとめ」をするわけだから、今さら相手に内容をたずねたり、確認する必要はないからだと考えられる。

参考文献

- Biber, Douglas et al. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Pearson Education Limited.
- Blakemore, Diane. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Basil Blackwell.
- Blakemore, Diane. 1988. 'So' as a Constraint on Relevance. In: R. Kempson (ed.) *Mental Representation: The Interface between Language and Reality*, 183-195. CUP.
- Blakemore, Diane. 1992. *Understanding Utterances*. Oxford: Basil Blackwell.
- Blakemore, Diane. 2002. *Relevance and Linguistic Meaning: The Semantics and Pragmatics of Discourse Markers*. CUP.
- Bolden, Galina. B. 2006. Little Words That Matter: Discourse Markers “So” and “Oh” and the Doing of Other-Attentiveness. *Social Interaction. Journal of Communication*, 56, 661-688.
- Bolden, Galina. B. 2009. Implementing Incipient Actions: The discourse Marker “So” in English Conversation. *Journal of Pragmatics*, 41, 974-998.
- Nishikawa, Mayumi. 2010. *A Cognitive Approach to English Interjections*. Tokyo: Eihosha.
- Rouchota, Villy. 1998. Procedural Meaning and Parenthetical Discourse Markers. In A. Jucker and Y. Ziv (eds.) *Discourse Markers: Descriptions Theory*. Amsterdam; John Benjamins, 97-126.
- Schiffrin, Deborah. 1987. *Discourse Markers*. CUP.
- Schourup, Lawrence. 1999. Discourse Markers. *Lingua* 107, 227-265.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986/1995. *Relevance-Communication and Cognition*. London: Blackwell.
- Swan, Michael. 2005. *Practical English Usage*. OUP.
- Wilson, D and D. Sperber. 1993. “Linguistic Form and Relevance.” *Lingua* 90, 1-25.
- Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* (8th edition, *OALD8*). 2010. OUP.

Summary

Discourse marker *so* (henceforth, DM *so*) is considered to be used to indicate that the proposition expressed in the following segment is to be interpreted as a result (or a contextual implication) of the proposition expressed in the preceding segment (Schiffrin 1987; Blakemore 1988 etc.). On the other hand, DM *so* is also used in various slots in discourse: when the speaker intends to start or close the conversation, to introduce a new topic, to change or extend an ongoing topic, to back to the original topic, or to summarize the discourse. Neither Schiffrin nor Blakemore, however, has explained why these functions are produced by using DM *so* in certain contexts. This paper clarifies the cognitive mechanism in the hearer's interpretation of utterances which are connected by DM *so*, and shows that DM *so*'s multi-functionality can be accounted for by considering its core meaning encoded by DM *so*, the cognitive scope involved in the hearer's interpretation and its cognitive effects pragmatically derived by using DM *so*.